

第24回(平成27年度)鹿児島県青少年国際協力体験事業



# ក្រសាគខេត្តសាសនបច្ចុប្បន្ន

## 心豊かなタクマウ



## 鹿児島県青年国際協力体験事業実行委員会

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会

青年海外協力隊鹿児島県OB会

公益財団法人 鹿児島県国際交流協会

# はじめに



鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会  
会長 弓場 秋信  
(鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長)

鹿児島県青少年国際協力体験事業は、平成3年にマレーシアに派遣以来、今年24回目を迎えました。開発途上国で「国づくり、人づくりに貢献する」青年海外協力隊員の活動現場に鹿児島の青少年を派遣し、国際協力に対する理解を深めると共に、ホームステイ等での異文化体験、学校等での現地学生との交流を通して、国際性豊かな青少年を育成することを目的に、鹿児島県青年海外協力隊を支援する会、青年海外協力隊鹿児島県OB会、公益財団法人鹿児島県国際交流協会で構成された実行委員会で実施しています。これまでに、マレーシア、インドネシア、タイ、ベトナム、ラオス、カンボジアの6ヶ国に県下一円から今回の16名を含む301名の中高生を派遣しました。

今回の派遣国は、昨年に引き続きカンボジアです。1953年にフランスから独立し順調に国づくりが進められていましたが、1970年から1991年にかけての内戦と圧政による混乱、特に1975年から1979年のポルポト政権下での知識階級を中心とした大虐殺は、その後の国づくりに物心両面で大きな爪痕を残しました。悲しい歴史を乗り越え新たな国づくりに取り組むカンボジアに、日本を含む国際社会が様々な援助を行っています。その一つが、1965年に発足した青年海外協力隊事業です。事業発足と同時に派遣が始まったカンボジアは、前述の事情で中断を余儀なくされましたが、治安の回復を待って再開されました。現在は、ASEAN 東南アジア諸国連合派遣国の中で最多の隊員が、カンボジアで人づくり・国づくりに活動中です。国際協力の最前線に触れられる現場として最適と考えます。

本事業の共催市である鹿児島市、鹿屋市、霧島市、枕崎市、南九州市、南さつま市、いちき串木野市からの推薦12名と、企業の協賛を得ての実行委員会推薦の4名は、2回の事前研修でクメール語、カンボジア事情、青年海外協力隊活動と国際協力、日本・鹿児島について学び、7月19日～26日の日程で鹿児島中央駅を後にしました。

団員は、国際協力機構JICAカンボジア事務所で、カンボジアにおける青年海外協力隊事業や国際協力等について学んだ後、カンダール州タクマウ市のホームステイ先に移動しました。4泊のホームステイ期間中に、協力隊員が活動するタケオ州トンレバティー、カンダール州サテボー中学校での活動現場視察、ヌワット中学校での学生との交流、そして村民との文化交流を行っています。

ここに団員の日々の体験・見たこと・感じたことが綴られた報告書「ក្រោមតាមទំនាក់ទំនង (心豊かなタクマウ)」を作成致しましたので多くの皆様にご覧頂ければ幸甚に存じます。

終わりに、本事業実施に当たりご支援ご協力を頂いた共催市、協賛企業、国際協力機構九州国際センター、JICAカンボジア事務所、心温まるもてなしでホームステイを受け入れて頂いたタクマウ市タクマウ第3村、ブレイク・サムラオン村の皆様、そして活動中の青年海外協力隊員をはじめとする多くの関係者に、心より感謝申し上げますと共に、今後とも本事業へのご支援・ご協力を賜ります様お願い申し上げます。

# もくじ

## はじめに

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会 会長 弓場 秋信

## ごあいさつ

鹿児島県商工労働水産部観光交流局長 長野 信弘

## 第24回（平成27年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要

2

## 参加団員等名簿

3

## スケジュール

4

## 地図

5

## 体験事業ドキュメント（総集編）

6

～事前研修から帰国報告会までの様子を団員の日記と併せて紹介します～

## 団員が感じたこと

15

「カンボジアで学んだこと」

伊地知 優  
徳留 亮  
盛山 子

「中学校との交流」

慶太  
桜子

「学び得たこと」

久保佑子

「かけがえのない体験」

原永奈

「カンボジアに行って」

籠原希

「日本と違うカンボジア」

白澤舞

「オーケン」

有川ほのか

「この1週間で」

崎野響

「カンボジアで学んだこと」

新屋那

「国際協力について考えてみたこと」

有上茉

「カンボジアでの体験」

豊留音

「カンボジアで学んだこと」

西亜弥

「カンボジアへ行ってきました」

栗ヶ窪陸

「高2の夏 カンボジアの夏」

福満翔

「カンボジアで学び、感じたこと」

大城天

「人なつっこいカンボジア人」

土持音

「優  
亮  
子  
太  
奈  
希  
舞  
ほのか  
響  
那  
音  
弥  
陸  
翔  
天  
音  
ひかり」

## 団長報告

31

「第24回鹿児島県青少年国際協力体験事業 報告書」

桑山 昌洋（鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 理事）

## 同行者感想

32

「青少年体験事業報告書」

瀬角 龍博

「カンボジア体験事業に同行して」

田代 芽衣

「百聞は一見にしかず」

直岡 佳奈

「オーケン－感謝のカンボジア体験記－」

上山 智子

「未知の世界に触れること、伝えるということ」

西 浩一朗

## 新聞記事（南日本新聞）

37

## 特別開催

44

鹿児島県青少年国際協力体験事業 O B会

## 参考資料

47

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要

47

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績

48

## ご あ い さ つ



鹿児島県観光交流局長  
長野信弘

「第24回(平成27年度)鹿児島県青少年国際協力体験事業」が無事成功裡に終了したことを心からお喜び申し上げます。

これも、事業実施に御尽力なさった弓場秋信会長をはじめとする実行委員会及び共催市の方々の御労苦の賜であり、心より敬意を表します。

また、皆様方にはかねてから本県の国際交流・国際協力に関する施策の推進に格別の御尽力をいただいておりますことに対しまして、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

今回の体験事業では、7月19日から26日まで7泊8日間の日程で、昨年同様カンボジアを訪問し、サッカーの指導及び青少年活動支援を行っている青年海外協力隊員2人の活動現場を視察したほか、現地家庭でのホームステイ、現地の中高生との交流等を体験したと伺っております。

団員の方々の帰国後間もない9月3日には、埼玉スタジアムにおいてサッカーのワールドカップアジア大会アジア2次予選、日本代表対カンボジア代表の試合が開催されました。指導者としてカンボジアサッカーのレベルアップに懸命に取り組んでおられる協力隊員の奮闘ぶりを間近で御覧になった団員の方々は、きっとカンボジア代表にも熱い声援を送られたことと存じます。

帰国派遣団員の方々は、7月30日県庁を訪問し、県教育長及び国際交流課長に帰国報告をされました。カンボジアの食事など生活習慣や宗教、歴史に加え、人々の心の温かさ、さらには国際社会の協力活動が現地でどのように受け止められているのかなど、多岐にわたりたいへん興味深いお話をいただきましたと聞いております。

今回の訪問で、団員のみなさんが自分の目で見て、感じ、考えてきたことは、現地を訪れなければ、決して経験できなかった、たいへん貴重なものだと思います。それらを心の奥深くに刻み込み、今後の人生を生きていく上での糧とするとともに、是非、多くの方々に積極的に伝えてほしいと希望しております。

また、今後も様々な機会を捉えて国際交流・協力や国際社会等について学習され、みなさんの今後の進路決定等に活かしていかれることを期待しております。

最後に、「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の今後ますますの御発展と、関係の方々及び団員とその御家族の皆様方の御活躍・御多幸を祈念してあいさつといたします。

## 第24回（平成27年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要

<b>1 主 催</b>	鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会 ※ 構成団体 鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 青年海外協力隊鹿児島県OB会 公益財団法人鹿児島県国際交流協会
<b>2 共 催</b>	鹿児島市、鹿屋市国際交流協会、枕崎市教育委員会、 霧島市国際交流協会、いちき串木野市国際交流協会、 南さつま市友好交流推進協議会、南九州市教育委員会
<b>3 後 援</b>	鹿児島県 鹿児島県教育委員会 独立行政法人国際協力機構九州国際センター
<b>4 協 力</b>	在日カンボジア王国大使館
<b>5 協 賛</b>	鹿児島空港ビルディング(株) 鹿児島トヨタ自動車(株) 鹿児島ヨコハマタイヤ(株) (株)鹿児島銀行 (株)下堂園 (株)ミサカ (株)Misumi (株)山形屋 (株)レイメイ藤井 キンコー醤油(株) 小正醸造(株) 薩摩酒造(株) 太陽運輸倉庫(株) 南国殖産(株) 弓場貿易(株)
<b>6 事業の流れ</b>	4月～5月 募集・団員決定 6月7日（日） 第1回事前研修 6月27日（土）～6月28日（日） 第2回事前研修 7月19日（日） 出発 7月26日（日） 帰国 7月30日（木）～8月13日（木） 表敬訪問 8月22日（土） 報告会 9～10月 報告書作成
<b>7 派 遣 国</b>	カンボジア王国
<b>8 派 遣 期 間</b>	平成27年7月19日（日）～7月26日（日）
<b>9 派 遣 人 員</b>	(1) 参加者 16名 (2) 引率者 6名

## 参加者団員等名簿

### ■ 団 員

	名 前	性別	学 校	学年	市 町
1	伊地知 優	女	鹿児島純心女子中学校	3	鹿 児 島 市
2	徳留 慶亮	男	鹿児島市立鴨池中学校	1	鹿 児 島 市
3	盛山 桜子	女	鹿児島市立鹿児島玉龍高等学校	2	鹿 児 島 市
4	久保佑太	男	鹿児島県立鹿屋工業高等学校	3	鹿 屋 市
5	籠原永奈	女	枕崎市立桜山中学校	1	枕 崎 市
6	白澤希	女	鹿児島県立川辺高等学校	2	枕 崎 市
7	有川舞	女	鹿児島県立加治木高等学校	2	霧 島 市
8	崎野ほのか	女	学校法人神村学園高等部	2	いちき串木野市
9	新屋響	男	学校法人神村学園高等部	2	いちき串木野市
10	有上茉那	女	南さつま市立大笠中学校	2	南 さ つ ま 市
11	豊留朱音	女	鹿児島県立川辺高等学校	2	南 九 州 市
12	西亜弥	女	鹿児島県立川辺高等学校	2	南 九 州 市
13	粟ヶ窪陸	男	鹿児島県立沖永良部高等学校	2	知 名 町
14	福満天翔	男	鹿児島県立加治木高等学校	2	始 良 市
15	大城彩音	女	鹿児島純心女子高等学校	2	指 宿 市
16	土持ひかり	女	出水市立江内中学校	2	出 水 市

### ■ 同行者

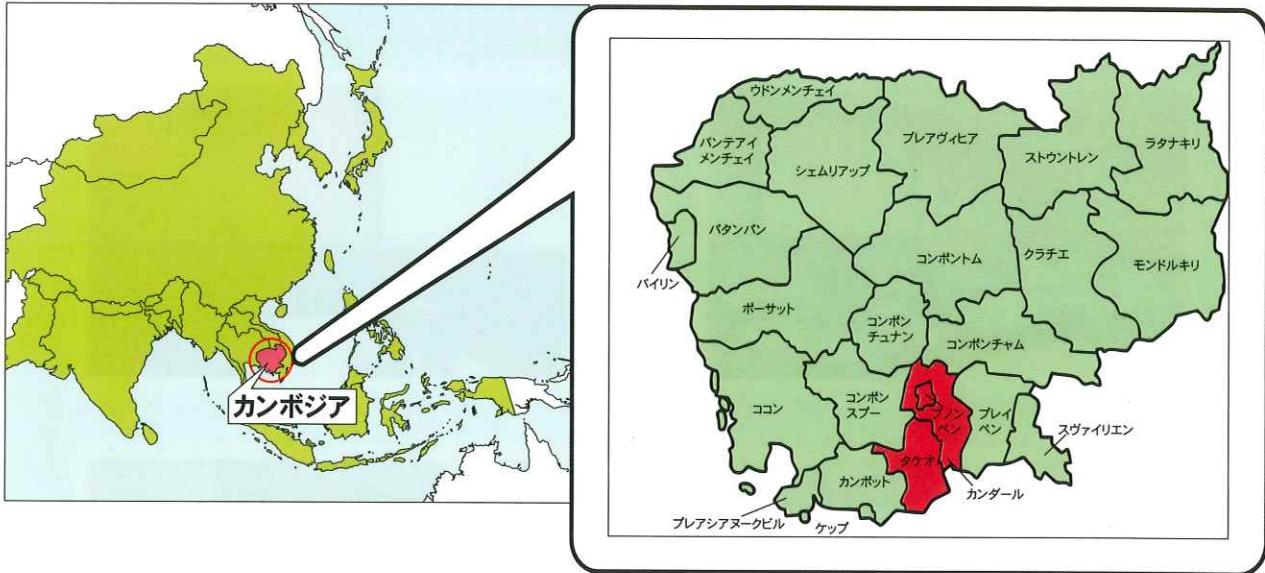
		名 前	性別	備 考
1	団長	桑山昌洋	男	鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 理事
2	調整	瀬角龍博	男	青年海外協力隊ガーナOB(理数科教師)
3	健康管理	田代芽衣	女	青年海外協力隊ラオスOG(看護師)
4	調整	直岡佳奈	女	公益財団法人鹿児島県国際交流協会 交流推進員
5	記録	上山智子	女	南日本新聞編集局報道部 記者
6	記録	西浩一朗	男	鹿児島テレビ放送局株式会社 報道制作局報道部 記者

## スケジュール

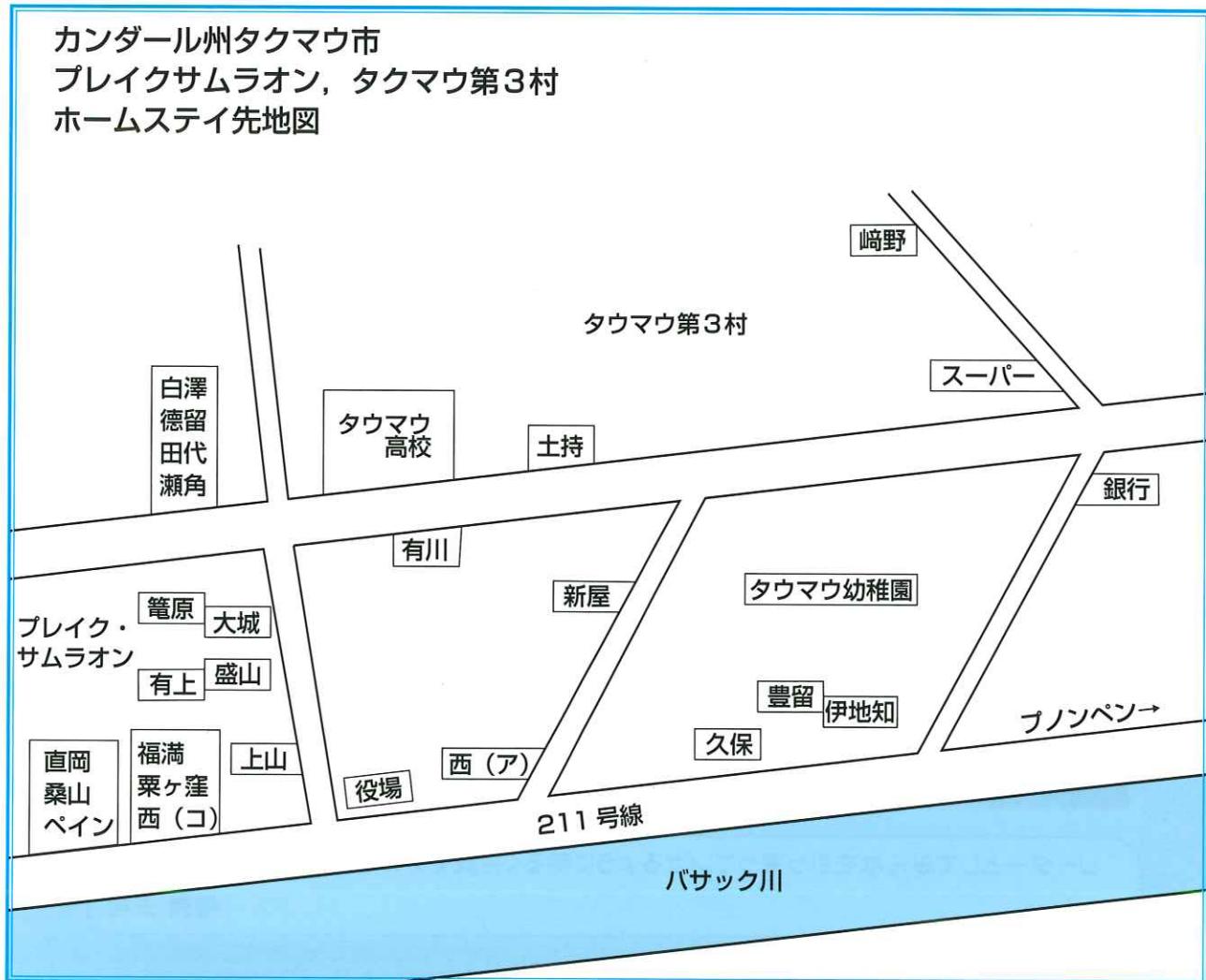
月 日	曜	地 名	時 刻	交通機関	内 容	宿 泊
7月 19日	日	かごしま県民交流センター 鹿児島中央駅 博多駅 福岡空港 ソウル（仁川空港） ソウル（仁川空港） ブノンペン (ブノンペン国際空港)	10:00 12:40 発 14:05 着 16:25 発 17:55 着 18:45 発 22:10 着	さくら556号 KE790 KE689	集合・結団式 福岡空港へ移動 チェックイン  バス ホテルへ移動	
7月 20日	月	ブノンペン カンダール州タクマウ市 (タクマウ第3村、プレイ ク・サムラオン村)	10:00 10:30-12:00	バス	出発 JICA カンボジア事務所 表敬 昼食（イオンモール） 午後：ホームステイ先へ移動 タクマウ市表敬訪問	ホームステイ
7月 21日	火	カンダール州			終日：ホストファミリーと過ごす	ホームステイ
7月 22日	水	カンダール州 タケオ州トンレバティー カンダール州	6:30 7:30-11:00 14:00-17:00	バス	出発 青年海外協力隊員活動視察 【サッカー：壱岐友輔隊員】 場所：Cambodia National Football Center  学校交流 場所：アヌワット中学校	
7月 23日	木	カンダール州	8:00～ 8:30-11:00 18:00-20:30	バス	出発 青年海外協力隊員活動視察 【青少年活動：鈴木有華隊員】 場所：サテボー中学校 夜：お別れ会	ホームステイ
7月 24日	金	カンダール州 ブノンペン	9:00～ 10:00～ 11:00-15:00 18:00～	バス	午前：村とのお別れ ブノンペンへ移動 ブノンペン視察① (セントラルマーケット、イオン) 現地関係者との食事会 場所：クメールスリンレストラン	ホテル
7月 25日	土	ブノンペン	9:00～ 18:00	バス	ブノンペン視察② (王宮&シルバーパコダ、国立博物館 ツールスレン博物館) 空港へ移動	機内泊
7月 26日	日	ブノンペン (ブノンペン国際空港) ソウル（仁川空港） ソウル（仁川空港） 福岡空港 博多駅 博多駅 鹿児島中央駅	0:20 発 7:30 着 8:20 発 9:40 着 10:50 着 11:01 発 12:37 着	KE689 KE787 さくら407号	博多駅へ移動  解団式（鹿児島中央駅1階待合スペース）	

# 地図

カンボジア州区分地図



カンダール州タクマウ市  
プレイクサムラオン、タクマウ第3村  
ホームステイ先地図



# 体験事業ドキュメント（総集編）

～事前研修から帰国報告会までの様子を団員の日記と併せて紹介します～

## 第1回・第2回事前研修

6月7日（土）、27日（土）～6月28日（日）

### 体験事業についての説明



### 国際協力について（青年海外協力隊 体験談）



### 語学講座（クメール語）



### カンボジア人留学生のキム・ヘン君による文化講座



### 現地での出し物の練習



### カンボジアについて調べたことの発表



### カンボジアの歌「アラビア」の成果発表



リーダーとしてみんなを引っ張つていけるように明るく笑顔で努めることを決意しました!

福満 天翔

## 7月19日(日)

結団式・出発



自分から積極的にコミュニケーションを取り、後悔のないように努めたいです。

崎野 ほのか

## 7月20日(月)

JICA カンボジア事務所訪問



「ボランティアは相手目線で、相手の気持ちを考えることが大切だ」というところに共感できました。私にも「やっぱり途上国だから...」という考えがあるのかと思い、その心は取り除かないといけないと感じました。

土持 ひかり

カンダール州タクマウ市表敬訪問



7月20日(日)

ホストファミリーとの対面(タクマウ第3村 ブレイク・サムラオン村)



7月21日(月)

ホストファミリーとの1日



ホストシスターと一緒に折り紙で鶴やひまわりを作りました。ホストマザーの生徒が来て、みんなでお話をしたり、写真を撮つたりもしました。日本の写真を見せたら喜んでくれました。

篠原 永奈





早朝から家事=仕事をする中2のホストシスターには驚きました。いつも母がしてくれる家事は、ここでは母の仕事ではないのに当たり前のようにしてくれることに感謝します。

伊地知 優

おばあさんと寺院へ行きました。日本とは逆で仏像の後方に電光掲示板もあり、近代化されていました。しかし、町は昔の名残があり対照的でした。

西 亜弥

### 7月22日(水)

午後：協力隊活動現場視察（壱岐友輔 隊員・サッカー）  
カンボジアフットボール連盟 カンボジアフットボールアカデミー





2023年の試合に目標を置き、しっかりとカンボジアのサッカーチームの育成にあたっていることに感動しました。カンボジア vs 日本の試合のときは、カンボジアの選手が頑張って日本選手を倒して欲しいと思います。

新屋 韶

### 午後：アヌワット中学校での交流会





教室には電灯はなかつたけれど、生徒の笑顔はまぶしかつたです。生徒たちとは有意義な意見交換ができる、自分の将来についても考えさせられました。

徳留 慶亮

### 7月23日(木)

午前：協力隊活動現場視察（鈴木 有華 隊員・青少年活動）  
カンダール州教育青年スポーツ局配属 サテボー中学校



鈴木隊員は、授業中では手拍子でリズムを取って工夫をしていました。情操教育は始まったばかりの段階だから、効果はまだ見られないようですが、共有のものを管理することができるようになったそうです。

盛山 桜子



## 夜：ホストファミリーとのお別れ会



「クニヨム チョール チエツ  
ケア ナー」笑顔が良いと言  
われて嬉しかったです。最  
後の夜は、自分の発表のビ  
デオを見ながら、語り合  
いました。

有川 舞

7月24日(金)

## 午前：ホストファミリーとのお別れ



見知らぬ自分を温かく迎え入れてくれて、とても優しかったです。日本では温かいお茶やクーラーなど当たり前のことですが、決してそうではないことが分かりました。

久保 佑太

## 7月24日(金)

プノンペン周辺観光（セントラルマーケット）



値段の交渉をするのは案外大変でした。お店の前にいると話し掛けて来るので、「いらない」というのに勇気がいりました。　白澤 希

## 夜：元青年海外協力隊員（浅水伸介さん）とのお食事会



## 7月25日(土)

プノンペン周辺観光



年月が経った今でも刑務所の床に血がしみ込んで残っていることに驚きました。亡くなつた方や骸骨の写真をみて「これは本当にあつたことなんだ...」と実感しました。豊留 朱音

7月26日(日)

帰国・解団式



7月30日(木)

表敬訪問



将来国際協力に少しでも関係のある仕事をしたいなと思いました。カンボジアで学んだことを多くの人に話すことで、国際協力に関心を持つてくれる人が増えれば良いと思います。  
大城 彩音



8月22日(土)

報告会



この研修のためにたくさんの方がご協力下さいました。カンボジアで充実した生活が出来たのも皆さんのお陰だと思います。一生の思い出になりました。感謝の気持ちを忘れずにいたいです。  
有上 茉那

自分たちの住んでいる環境はとてもとても恵まれているという点を理解して、今後行動します。ポルボト政権のカンボジアの歴史を聞き、「絶対に簡単には諦めない!」と思いました。また、与えられて当然ではなく「感謝」したいと思います。  
栗ヶ窪 陸



# 団員が感じたこと

## カンボジアで学んだこと

鹿児島純心女子中学校 3年 伊地知 優

私がこの事業で一番心に残っているのは、ホームステイした家族の子どもの生活スケジュールだった。その子の名前はソニタといい、現在中2だ。ソニタは毎朝4時頃に起きて、朝ご飯を作る。次に家族の服を洗濯し、外に干す。すると、ちょうど、みんなが起きる頃になり、一緒にご飯を食べる。食べ終わると、すぐに皿洗いをし、家の掃除。そんな事をしていると、とっくに授業開始時間を過ぎ、9時に登校する。私はその様子を数日見ていたが、忙しさが尋常ではなかった。私が手伝おうとしても、「やらなくていいよ。これは私の仕事だから。」と言って、私の手を止める。「なぜ学校を休んでまで家事をするの。」と聞くと、照れながら、「大人になつたら結婚するでしょ。そんな時に困らないようにするためにだよ。」と答えた。私はこの考え方は昔の日本に似ているなと思った。女性は手に職につけることができないというジェンダー・ハラスメントの考え方方がまだ定着しているのだ。日本でも、国会議員の人でセクシュアル・ハラスメントに分類する野次を飛ばしている人たちもまだいるが、戦時中よりは良くなつたといえるだろう。1945年、憲法を改正して、昭和、平成とだんだん日本は成長してきた。そして何よりも義務教育という場を作っている事がすばらしい。

私たちは今回、二つの中学校に行った。そこで私は、カンボジア人にとって人とのつながりというのは大切なもののなんだなと感じた。なぜなら、Facebook や LINE を教え合っていたからだ。日本では1回会っただけで簡単に教えないが、カンボジアでは、会った人はみんな友だちみたいに接してくれる。とても温かく、人なつっこい性格の人が多いということを知った。そのような心の澄んだ子ども達はだいたい53%くらいしか中学に入学しないらしい。私はそのことを聞いて、とても驚いた。実際、教室も、机の数は少なく、密集して座っている。そのせいかもっと暑くなるのに、扇風機なんてどこにもない。しかも電気も付いていないという、勉強するには適さない環境であった。なのに、みんなは楽しそうに授業

を受けていたのを見て、日本に来たら、びっくりするだろうなと思った。

環境面といえば、道路の脇に捨ててあるゴミが頭に残っている。常に机の上や手はきれいにしておきたいめだそうだ。

私はカンボジアで何か違いを感じるたびに日本と比較をしていた。そこで分かったことは、やはり私たちは金銭でも、教育でも何をとっても恵まれている事だ。日本ではあたりまえの事なんて外国では通用しない。だからいつもカンボジアの人のように素直に温かく人と向き合い、理解し合う事が日本の課題だと思った。

私はカンボジアという発展途上国に行くのは怖いな、きっと生活をぎりぎりで送っていて厳しい日々を過ごしているのだろうなという勝手な考えを持っていた。実際にやってみると、日本よりも楽しそうにしていた。日本の幸せは、家庭を築き、両親とも働き共に子どもを養い、子どもを大学まで行かせる事だ。しかし、カンボジアでは、人間の根源、生きるという事、笑えるという事が幸せなのだとと思った。私がこれから人生で立ち止まった時、生きている事、笑える事に価値があるのだと思い、自分にまっすぐに向かい合っていきたいと思う。



サテボー中学校生徒と 本人：前列左から3番目



プノンペン町並み

# 団員が感じたこと

## 中学校との交流

鴨池中学校 1年 德留 慶亮

今回の旅で最も印象に残っているのは、私達がホームステイ三日目で行った、カンダール州にあるアヌワット中学校との交流である。まず目に入ったのは、日本の校舎とは似ていない玄関の無い2階建ての校舎だった。教室には電灯は無く、また天井がものすごく高く、シリリングファンがあり、黒板ではなく、ホワイトボードがあった。

アヌワット中学校の生徒達は、日本より涼しそうな制服を着て、とても笑顔がまぶしかった。

カンボジアの中学生を前に、私達は日本で練習してきた出し物を披露した。まずは、弓道。私はとてもかっこ良く感じたが、きっとカンボジアの生徒達には、理解するのに時間がかかったと思う。日本の文化の後は楽しくダンスをした。サングラスをかけ、氣志團の曲で私もバルーンアートをやりながら踊った。ペンシルバルーンをねじって、犬や花などを作る、バルーンアートはカンボジアの人々に喜んでもらえた。また、ダンスには大きな手拍子があり楽しんでもらえたことがとてもうれしかった。

「世界に一つだけの花」の歌詞を曲を流しながら、書道を行うパフォーマンスでは学校中の生徒が見てくれていた。

最後にもう一度ダンス。「恋するフォーンチュンクッキー」を多くの人たちの前で披露して、はずかしかったと思う。

私もはずかしかったが、カンボジアの人達に喜んでもらうためにがんばって良かった。みんなも心を開いてくれて、とても有意義な質問タイムが始まった。「すしは知っていますか。」との我々の質問にカンボジアの生徒は「知っている。しかし、食べたことがない。」と答えた事が印象に残っている。すしは、今では世界で有名だ。いつかみんなに食べてもらいたいと思った。

また外国語に英語とフランス語の2カ国語を勉強していることに正直おどろいてしまった。私は、中学校で英語だけ外国語の時間にやっている。もっと世界を知っ

て、外国語に興味を持って勉強しないといけないと感じた。その後、みんなで、アラピアを歌った。この歌の歌詞は、「楽しく集まり 悲しくならないように楽しく踊る 深夜までリズムに乗って踊る 土曜の夕方は休みだ。」という内容である。私達は心を込めて精一杯歌った。カンボジアの生徒達も歌ってくれて嬉しかった。おはらぶしを踊り交流は終わってしまった。とても楽しく貴重な時間だった。またどこかで彼らと話等をしたいと思っている。

この日は、私の将来の夢を考える1日となった。日本の料理人をしてJICAに参加し、カンボジアの子ども達にすしやラーメンを食べさせてあげるという夢もいいなと思っている。



現地学生と 本人：前列右



車窓から子どもの働く姿を目撃

## 学び得たこと

鹿児島玉龍高等学校 2年 盛山 桜子

外国に対するイメージや先入観は、あてにならないと思いました。出発前、私のカンボジア行きを知った友達が「生きて帰ってきてね」と冗談交じりで言ったように、カンボジアのイメージは、貧困や戦争、地雷などマイナスなものが多かったです。私も現地に着くまではそれが不安で、少し身構えていました。

しかし、機内から見えたプノンペンの街はとても明るく、「思いのほか都会だ」ととても驚きました。同時に、カンボジアの経済格差をそこに見たような気がします。

また、現地の人の温かさには救われました。学校へ行くと、たくさんの生徒が私たちを珍しそうに見ていましたが、目が合うとっこりしてくれたのが印象的です。英語でのコミュニケーションや一緒に写真を撮るうちに、うち解けることができました。

そして、私にとって一番の難関は、ホームステイでした。最初は言葉がわからずホームシックになりましたが、そんなとき団長が来てくださいました。それぞれの家で過ごすメンバーの話を聞いて、自分は神経質になりすぎだと気付きました。もっとラフにいこうと思うと、それまでまくしたてられているように聞こえた言葉も怖くなり、反応を返すことができるようになりました。練習してきた言葉で自分からも話しかけることができて、より親交を深められました。私がホストファミリーにホットケーキを作ったときも、おいしそうに食べてってくれて安心しました。また、現地で本当に必要なことの慣れは早く、自分でも驚きました。例えば、ステイ先で毎日出くわすゴキブリが怖くて「ゴキブリ」「捨てる」という単語はすぐに覚えました。自分でゴキブリスプレーをかけることもできるようになりました。ホームステイ最後の夜、ホストファミリーが「あなたはもう家族だからカンボジアに来たら、またここに来てね。」と言ってくれました。初日の不安と緊張を乗り越え、別れが名残惜しくなるほど仲良くなることができて嬉しかったです。

日本人のイメージではカンボジアは支援する国になりがちですが、そればかりではないと思います。もちろん

手助けをしている場もありますが、現地で過ごすうえでは誰でも、現地の人の優しさにふれることや助けられることがあります。JICA事務所の方や青年海外協力隊の隊員の方が、「支援のために来っていても、言葉や文化の面では現地の人に助けてもらっているから、おたがいさま」と話してくださいました。こういうスタンスでの国際協力が一番理想的だと思いました。やみくもにお金や物資を送ることが主流になっている国際協力が、もっと人道的にとらえられるように、実際に現地を訪れた私たちは周りに広める役目を持っていると思います。この事業に参加して、国際協力の在り方やコミュニケーションの難しさと楽しさを学びました。日本では学び得なかつたことですから、とても感謝しています。



アヌワット中学校にて 本人：後列左から4番目



ホストファミリーと 本人：中央

# 団員が感じたこと

## かけがえのない体験

鹿屋工業高等学校 3年 久保 佑太

私は、今回カンボジアに行かせて頂いたおかげで日本で当たり前のようにあったものは当たり前ではないんだということに気付かされました。それを一番感じたのは、学校訪問の時です。カンボジアの教室には電気がありませんでした。そして、暑さを凌ぐ扇風機もクーラーもありませんでした。私は、「真っ暗なサウナ」という印象でとても勉強ができるような環境ではないと思いました。ですが、カンボジアの子どもたちは実際にそこで勉強をしています。私たち日本の学生は、電気のついた明るい教室で夏の暑いときでも、扇風機やエアコンのついた涼しい教室で勉強が出来ます。今回カンボジアの学校に行ったことで、日本の学習環境がどれだけ贅沢だったんだということを気付かされました。これからは、こういった環境を当たり前だと思わないで、感謝をしていかなければいけないと思いました。

また、私はホームステイの中でカンボジアの人の優しさに感動しました。出会った当初、クメール語でしゃべりかけられても何も分からず笑顔でいることしかできませんでした。ですが、家族のみんなは、嫌な顔ひとつせず指さし会話帳で一つ一つ説明してくれました。最初私は言葉もわからない中、一人でいるのが苦痛でしたが、だんだん話している内容がわかってきて、ファミリーといるのが楽しくて仕方ありませんでした。お別れの前日、私は家の周りを散歩したいと言い出かけました。すると、後ろから後についてくる人影が見えました。私は、カメラとかを狙われてるのではと思ったのですが、後ろを見ると、それは、ファミリーのお兄ちゃんでした。私が「どうしたの？」と聞くとお兄ちゃんは「失う、怖い、ユウタ」と答えました。私が危ない目に遭わないかずっと見ていてくれたそうです。私は見知らぬ日本人を大切にしてくれるお兄ちゃんの優しさに感動しました。お別れの時、ファミリーはサッカーカンボジア代表のユニフォームをくれたり、フルーツやあげぱんなどをくれ、涙まで流してくれました。私はホームステイのおかげでかけがえのない家族ができたと思います。この出会いを大切にしていきたいです。

そして、今回青年海外協力隊の壱岐さん、鈴木さんの活

動の視察もさせてもらいました。その中で自分の持っている技術を教えるということは素敵なことだなと思いました。私は両親が青年海外協力隊だったのでそういった活動があるということは知っていましたが、実際の活動は見たことがありませんでした。実際に見て、壱岐さんも鈴木さんも楽しそうでしたが、教える生徒の方々も楽しそうでした。そういった、人を幸せにできるところが青年海外協力隊の魅力だと思います。今回カンボジアに行ったことで私も青年海外協力隊になって、誰かのために役に立ちたいという気持ちが強くなりました。

私のカンボジアに行く前のイメージは「昔の内戦の影響で地雷が多く埋まってる危険な国」という負の印象でした。ですが、行ってみると全然私のイメージと違いました。帰国して私の中でカンボジアは「人が温かい、食べ物のおいしい素晴らしい国」という印象に変わりました。また何らかの形でカンボジアに携わったり、今度は、家族で泊まりに来なさいとファミリー言われたので、家族をつれてカンボジアに行きたいと思います。本当にいい体験をさせてもらいました。この体験は一生の宝物です。



優しいお兄ちゃんと赤ちゃん



ホストファミリーとの食事

## カンボジアに行って

桜山中学校 1年 篠原 永奈

私は、約1週間カンボジアに行ってきました。カンボジアは、開発途上国なのであまりいろいろな面で進んでいないのかなと思っていた。私は印象に残ったこと、楽しかったこと、不安に思ったこと、とカンボジアでは色々な感情が生まれてきました。

印象に残ったことは、カンボジアの町です。ホテルに一日目に泊まった時に窓から写真を撮りました。家に帰ってから見ると日本とはずいぶんと違う風景でした。ゴミの山のところに人がいたり、そのとなりの工事現場の足場をよく見てみるとすごく不安定でした。日本は、ゴミは決められた場所に捨て工事の時は足場はしっかりしています。こういうことが改めて大切なと思いました。

次に、楽しかった思い出です。ホストファミリーの方と1日一緒に過ごしたことです。午前中には、学校の生徒が来ていたらカンボジア語と英語の二つの言葉を使ってたくさんお話をしました。カンボジアの人は、やさしくて私が会話帳で言葉を探している時に一緒に探してくれて、会話もはずみうれしかったです。午後は、トゥクトゥクに乗っていろんなところに行きました。始めは、



カンボジアのまち

公園みたいなところに行きました。さるとか、くじゅくとかいて動物園みたいでした。そして、次の場所に行く時に牛の大群に会いました。すごい勢いで通り過ぎていきびっくりしました。

私は、ホームステイをしている時に、何度か「家に帰りたい。」そう思いました。なぜかというと、トイレは水洗トイレではなく、自分で流すトイレでした。初めて見て、最初はとまどいました。でも、あとから慣れてきてすぐトイレに行けるようになりました。そして、もう一つあります。それは、おふろです。まず、お湯が出ません。日本は、温かいお湯ですがカンボジアは、冷たい水でした。次に、シャワーがありません。シャワーがなかったので、おけでいちいちくんで大変でした。

でも、この約1週間カンボジアに行って、日本は恵まれている、水や電気を大切にしなきゃという自分の心に気づけたのでとても良かったです。



ホストシスターと 本人：右

## 団員が感じたこと

### 日本と違うカンボジア

川辺高等学校 2年 白澤 希

7泊8日のカンボジア研修で学んだこと、初めて見たこと、経験したことがたくさんありました。そして、私たちが普段していることが申しわけなく思いました。

まず私が一番印象に残っていることは、交通量の多さとその規制の緩さです。カンボジアの主な交通手段はバイク、車、トゥクトゥクという乗り物などです。そして日本と同じように信号があり、右側通行ではありますが、車線もしっかりとあります。しかし驚くべきことにカンボジアの人たちがこれらの規制を守っているところをほとんど見かけなかつたし、守らないからといって罰せられることもありませんでした。またホストファミリーと一緒に高速道路のように車が走る道を横切るなど、日本ではとても信じられないことでした。だからといって事故が起らないのでカンボジアの人たちは警戒心が強いことが分かりました。

また、カンボジアの人たちの活動時間は長いなと思いました。朝はとても早い時間から夜はとても遅い時間まで活動していました。ある朝、とても早く目覚めたので窓の外を見たその時にはすでにたくさんの車やバイクが走っていました。しかも朝早くから近くのマーケットはほとんど開店しているのを見て本当に驚きました。夜は、ご飯を食べ終わってしばらくしてから10時くらいには寝るのかと思いきや、ホストファミリーは全員が12時過ぎるくらいまで食卓で話をしていたので、なんだか新鮮で不思議でした。すごくあたたかさを感じて、本当にいい国に来れたなと思った瞬間でした。

ところが、人どうしがとても良い関係ですばらしいカンボジアも問題がありました。それは道路に落ちているゴミです。道を歩く人もホストファミリーもゴミをそのへんに捨てていました。私はそれを見たときとても驚きました。日本ではゴミはゴミ箱へ捨てるか、持ちかえるかをするし、人の前で捨てるなど信じられません。それにゴミが落ちていたら拾う人だっています。今まで日本のそういう環境で生活してきたのでとても衝撃でしたが、それもまたカンボジアの文化なのかなと思いました。

た。

私は今まで日本という小さな枠の中だけで生活してきました。だから、外国で暮らす人たちの文化、習慣など知らないことがたくさんあって、日本を中心に考えてきました。今回カンボジアの研修に行って今まで想像していたカンボジアという国ではないということが分かつたし、外の世界から客観的に日本を見る上で日本がどれだけ非常識で世界に通用しないかが分かりました。今回このような体験ができたからこそ伝えられることは多いと思います。カンボジアと聞いて「発展途上国じゃん。」というような人たちの偏見などをなくしていくべきだと思います。



アヌワット中学校にて 本人：後列右



おはら節を披露 本人：中央

## オークン

加治木高等学校 2年 有川 舞

中学生のとき青年海外協力隊の講話を聞き、心を動かされました。青年海外協力隊に興味があつただけでなく、人やモノをもっと広い範囲、世界を単位にしてみたいと思っていました。自分は贅沢なのだと思います。特に何不自由なく暮らしているし、楽しいのに、物足りないと思ってしまいました。逆に、今の生活とは反対だと思われる世界を知りたかったのです。私は、カンボジアを訪れることにしました。

青年海外協力隊の視察の一つで中学校に行きました。鈴木さんという女性が音楽の授業を行っていました。クメール語を習得していて、カンボジアの先生と変わらないほど、たくましかったです。教科書は鈴木さんが作ったもので、鍵盤ハーモニカは昔、日本の子供が使っていたものでした。そして、教室には電気がひとつもなく、後ろの席からでは黒板が半分みえるかみえないかの状態で受けている生徒もいるようでした。それに、教室は耐えられないくらい暑かったです。まだあまり環境が整っていないカンボジアですが、日本や中国などから、多くの支援を受けています。しかし、支援されることに慣れすぎ、それが当たり前だと勘違いしている人も少なくないそうです。そのせいか、ものあまり大切にしないようです。本当に必要な支援というのは、ただ、ものを与えるだけでなく、それまでの過程やいきさつを伝えることなのだと感じました。

次に、ホストファミリーと過ごした中でまだ鮮明に心に焼き付いていることがあります。ホストファミリーの親戚の家でアヒルのふ化しかけの卵、クメール語でポンティアコーンというものを食べたことです。ほぼ何でも食べる私が、事前研修の時からこれは食べないだろうと思っていたものです。それを目の前にすると更に食べる気は失せました。アヒルの頭やくちばし、羽ができかけているものです。目を瞑って食べさせてもらいました。想像とは全く異なりすごく美味しかったです。日本とカンボジア、食べ物、環境、ひとの見た目も中身も違う所は沢山ありました。危険な水や生野菜、ヘルメットなしのバイクや道端にいるサル、沢山の虫がいる中の食事、おお

まかなところや時間にルーズなところなど。でも、そんな中でも、元気に笑顔で暮らし、危ない道路でも自分の判断力や視野を広げ生活している、そんなカンボジアの人たちは素晴らしいです。生きる力を持っているのだと思いました。また、カンボジアに行きたいと思いました。

最後に、私はカンボジアで過ごしている間、特に学校での授業を見ているとき、早く勉強がしたいなあと思っていました。それは、国語とか数学とかそういうことだけではなくて、もっと生きていくための知識をつけたいということです。恵まれた環境で過ごしている私は、何かと甘えてばかりです。どんなことにも柔軟に対応できる人になりたいです。まだ一部しか知りませんが、カンボジアで見て、知ったことは私の先入観を覆すものばかりでした。固定観念や先入観は捨ててべきだと伝えていきたいです。そして、私が沢山の知識をつけて、それをカンボジアのような発展途上国で過ごす人々にも伝えられるようになりたいです。この企画を立ち上げてくれた方々、私が訪問するにあたって準備をしてくれた家族、カンボジアで支えてくれた方々に感謝しています。カンボジアはとても素晴らしい所でした。この目で見て、感じ、学ぶことができました。自分が学ぶことができ感謝したことを多くの人に伝え、また誰かの力になれるとうれしいです。



ツウクツウクで移動 本人：右から2番目



学校交流にて 本人：中央

# 団員が感じたこと

## この1週間で

神村学園高等部 2年 崎野 ほのか

私はこのカンボジア研修でほとんど体調をくずしていました。慣れない環境ばかりで、ホームステイ初日はすごく大変でした。ホームステイ先に着いたのが団員の中で最後だったため、夜でした。着いたらすぐに夜ご飯を食べ、就寝時間となってしまいました。私の部屋だけ電気をつけていたため、虫がたくさん集まってきて、蚊帳にとまっている虫を殺してから寝ました。お風呂は夜遅かったため次の日に入りました。トイレは使い方があまりよく分からなかったです。

次の日は、ホストファミリーと1日過ごしました。私をいろいろな場所につれて行ってくれて、沢山写真を撮ることができました。ホストマザーと一緒に住んでいる生徒二人と中学生の娘さんと行ったので沢山写真を撮り合えて楽しかったです。

そして次の日からは、JICA訪問や中学生との交流、活動視察などに行きました。活動視察は、鈴木さん、壹岐さん二人とも、クメール語が流暢でしっかりと生徒とコミュニケーションが取れていて尊敬しました。現地の中学生もすごくフレンドリーで、英語が伝わったため、フェイスブックなどを交換できました。また、生徒はすごく授業に集中していて、勉強することが当たり前になっていた日本人たちとは違うなと思いました。

ホストファミリーとのお別れが来るまで、片言英語で話を沢山しました。ホストマザーは、私にすごく良くしてくれて、一生懸命分からぬ日本語で私とコミュニケーションを取ろうしてくれたり、私が体調が悪く帰りが夜中になったときも起きて待っていてくれたり、おかゆを朝作ってくれたりしました。お別れの時間が近づくと、涙を浮かべてくれて、私は迷惑ばかりかけてしまったのにすごく申しわけなく思いましたが、嬉しかったです。

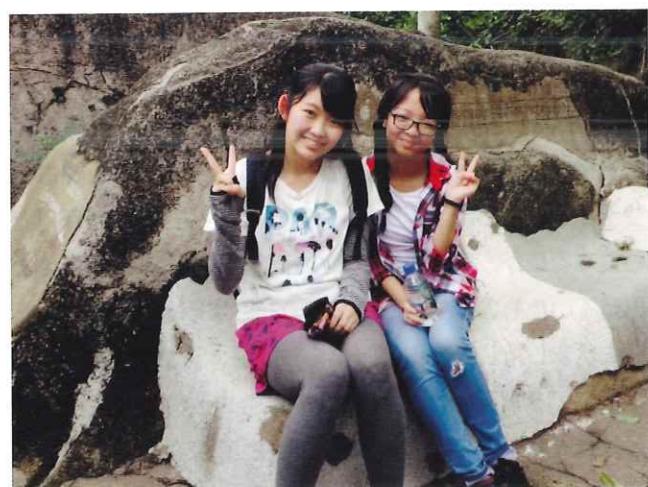
カンボジア滞在最終日、私達は多くの観光地に行きました。観光地には、お金を求めて来る地雷の被害にあった人が沢山いました。赤ちゃんを抱えている母親もいま

した。私はこの1週間で一番心を打たれました。「日本の常識は世界の非常識」という言葉のとおりでした。「不便な思いをした」と言う人が多々いると思いますが、それも日本の常識があたり前になっているのだなと思いました。私たちが今こうやって、勉強したり遊んだりすることができる事さえもカンボジアではあたり前ではありませんでした。

このカンボジア研修では、沢山の事を体で感じ学べることができました。カンボジア人の裏のない心の温かさや、日本がどれだけ幸せな国かなど、私はこれらはもっと今の生活に感謝してこれからを過ごしていきたいと思いました。



サテボー中学校の生徒と 本人：前列中央



ホストシスターと 本人：左

## カンボジアで学んだこと

神村学園高等部 2年 新屋 韶

7月19日、私たちはカンボジアに飛び立った。青年海外協力隊について興味があった私は、約一週間のカンボジアスタディーツアーに参加した。

福岡から韓国、韓国からカンボジアへと飛行機を乗り継いだ。カンボジアの空港に着いたときは、日本の空港よりは小さく、きれいだと感じた。しかし、外に出ると蒸し暑く見慣れない人たちを見て、少し圧倒された。少々不安を抱えたまま、ホストファミリーと出会った。そこで気付いたことは、カンボジア人はとても親切ということだ。クメール語が全く理解できない私に対して、私の寝る場所の確保や、蚊帳の設置をしてくださった。カンボジアでの生活を不安に思っていたが、そこで緊張が和らいた。

カンボジアでの生活が慣れはじめた頃、私たち日本人は、現地の中学生と交流会をした。現地の中学生はとても元気で、勉強したいという強い意欲を感じられた。小学校に入学するカンボジアの子どもたちは全体の96%だが、中学校に通い続ける学生は53%とJICAの方からいただいた資料に書いてあった。そのため、15歳から24歳の識字率は87%であった。日本では、中学校まで義務教育なため、嫌でも学校に行かなければならない。しかしカンボジアでは、家庭の事情により、学校に行きたくても行けないのである。そのことを知った私は、日本はなんて恵まれた国なんだろうと思ったと同時に、私たちが見えない部分から支援して、多くのカンボジアの子どもたちを学校に行かせてあげたいという気持ちになった。

日本に帰ってから私たちができるることは、使っていない物を寄付したり、募金したりということしかできないかもしれない。また、将来的に物事を考えて、自分がカンボジアで何かを伝えなければならないという使命感が沸いてきた。現地で働いている日本人の方のお話を聞いたが、壱岐さんという方は自分が得意なサッカーを教えていて、鈴木さんという方はクメール語を駆使して音楽の授業をしていた。私も将来、縁のあるカンボジアで、

自分の得意とするものや、日本の伝統行事に近いものを伝えていければいいなと思った。

この青年海外協力隊の元でカンボジアを訪れたことによって、自分の視野が大きく広がった。カンボジアで多くの体験をした。この体験は必ず将来どこかで生かせる時がやってくると思う。絶対忘れられない体験を、高校2年生の夏で出来たことに感謝したいと思う。



ホストファミリーと記念撮影 本人：右から2番目



ミニアンコールワット

## 団員が感じたこと

### 国際協力について考えてみたこと

大笠中学校 2年 有上 茉那

私がこの体験事業に参加したかった理由は、青年海外協力隊に興味があり、活動の様子を見学してみたかったということ、異国の文化に直接触れてみたかったということ、そして海外という広い視野を持つことで、今まで見えなかった日本の顔について知ることができるのでないかと感じていたからです。実際、7泊8日の体験で、たくさんのこと学びました。

私はカンボジアへ多少の偏見を持っていました。行く前の研修である程度の知識を得ていましたが、正直「発展途上国なので街も栄えていないんだろうな」だと、『日本から来た私達をあたたかく迎えてくれるのだろうか』など、私自身、すごく心配でした。しかし、カンボジアの地に着くと、そんな想いが飛んでいくくらい、予想を越えることばかりでした。

私達が着いたのは夜でしたが、すごくにぎやかでした。空港からホテルに着くまでの道もたくさんのライトで照らされていて、キラキラしていました。

二日目、JICA事務所を訪問した時の話が一番印象に残りました。JICAがカンボジアでどのような活動を行っているのか、青年海外協力隊についてなど、たくさんの知識を身につけることができました。また、内戦が終わり、少しずつ少しずつカンボジアは発展しているということも知りました。そして、海外で支援活動をする日本人を、誇りに思いました。

お話を最後、私達に説明してくださった方がおっしゃいました。「思いやりの心が大切です。」と。その意味は、「支援される側に上から目線で接しても、相手は決して良い気持ちにはならない」ということです。つまり、相手の心に届く支援、協力をためには、する側の「思いやりの心」が大切なのです。

今、カンボジアには多くの社会問題があります。海外からの支援を必要としています。そんなカンボジアへの支援をしている方々だからこそ、言葉の壁も努力で乗り越え、「思いやりの心」を形に変えることができて

いるのだと思いました。私はまだ、大人ではないので直接カンボジアでの支援はできません。しかし、協力することはできます。募金や物資の寄付、エコキャップ運動など、身近なところにたくさんの協力方法があります。小さなことかもしれないけれど、積み重なれば大きなものになります。そう信じて行動し続けることで、「思いやりの心」はつくられていくのではないかと考えました。

カンボジアを訪れて感じたこと。住む所、国籍、性別、話す言葉、すべてが違っても同じ人間。一期一会の出会いだからこそ異国の中で交流して、学ぶことができたのだと感じました。この体験は、すごく貴重なものであると共に、たくさんの方々が支えてくださいました。そのことを忘れず、さらに「思いやりの心」を持ち、普段の生活を過ごしていきたいです。



セントラルマーケットで買い物 本人：中央



鈴木隊員と記念撮影 本人：前列右

## カンボジアでの体験

川辺高等学校 2年 豊留 朱音

はじめに、このような貴重な体験をさせて頂き心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。

私はカンボジアで印象に残ったことが二つあります。

一つ目はホストファミリーとの交流です。私はホストファミリーと本当の家族のようになりたいと思う反面、言葉の通じない環境の中で上手くやれるかなと不安と緊張で胸がいっぱいでしたが、ホストファミリーの皆さんはそんな私を温かく迎えて本当の娘のように可愛がってくれました。子どもたちには日本から持ってきた折り紙をプレゼントしました。子どもたちはプレゼントを凄く喜んでくれて嬉しかったです。

ファミリーとの生活は驚きの連続でした。特に驚いたのは生活環境です。ホテルでは日本と変わらない生活が送れましたが、ホームステイでは日本の「当たり前」が通用しませんでした。空調設備は無く、お風呂は冷たい水、トイレは手流し。日本とかけ離れた生活を送る中、いかに日本の生活は恵まれているか痛感しました。私は高床式の家にホームステイさせて頂いたのですが、歩く度に板と板の隙間が大きく下の様子が伺えて床がギシギシ鳴るので、最初は床が抜け落ちるんじゃないかとヒヤヒヤしました。



ホストファミリーと 本人：左から2番目

二つ目は子どもたちの学習に対する意欲です。翌日、私は近所にホームステイした団員と一緒に、近くの学校の授業にお邪魔しました。教室の中は暑く、電気も無かったです。後方の席は黒板が見えないところもあります。でも、子どもたちは目をキラキラと輝かせて楽しそうに授業を受けていました。日本には整った教育制度があり、教育を受ける権利が保障されていて学校に行けることが「当たり前」です。子どもたちを見て学校に行けることに感謝し「勉強が嫌だ」「学校がだるい」など言っている場合ではないなと痛感しました。

カンボジアに行って、私の中で今まで常識だったこと、当たり前だったことが見事に覆され、考え方になりました。これから進路のことで迷うことや、別のことでも悩む日が来るかもしれません。でも、この1週間で学んだことを思い出して感謝の気持ちを持って取り組んでいきたいなと思いました。

ホストファミリーの皆さんともまた会いたいので将来またカンボジアに訪れます。

カンボジアは私の第二の故郷です！



ホームステイ先の高床式の家

# 団員が感じたこと

## カンボジアで学んだこと

川辺高等学校 2年 西 亜弥

初めに、事業への参加に賛同、協力してくれた両親、先生方、私たち研修生のために早くから動いてくださった事業関係者の皆さん、協力、支援してくださったすべての方々に心より感謝申し上げます。無事に研修を終了できましたこと、本当に感謝いたします。

カンボジアでの研修を通して私は、自分がどれだけちっぽけな存在で、どれだけ無知であるかを思い知られました。カンボジアまでの航路では、周りに日本人がいないという環境の中での飛行でした。聞こえてくる言語に日本語がないというあの状況はとても衝撃的で新鮮でした。

初めてカンボジアで朝を迎えた日、窓の向こうから休みなく聞こえるバイクの走る音や鳴り響くクラクションの音に導かれ、カーテンを開けた瞬間の感動は今でも覚えています。

窓の向こうに広がっていたものは、発展途上国とは思えないほど活気にあふれた都市の姿でした。この光景は、自分の中にあったカンボジア像とあまりにかけ離れていて、今まで自分の考えが発展途上国に対する自分の偏見だったのだと初めて気づくことができました。

現在のカンボジアは戦後の日本と同じ境遇であり、徹底的なポル・ポト政権下での虐殺の時代を乗り越え、都市部を中心に急速に発展が進んでいるとのことでした。しかし、未だに激しい貧富の差が残っていました。ステイ先からすぐ近くの市場へでかけると、物乞いをするご老人や子ども、地面に座り込んでいる痩せ細った方々を頻繁に見かけました。今まで目にしたことのなかったこの光景はあまりに衝撃的で、本当に同じ国なのかと自分の目を疑うほどでした。時が流れている場所と止まっている場所を行き来する、そんな感覚でした。

また、カンボジアはバイクの交通量が非常に多いことが印象的でした。しかし、驚くべきことにヘルメットをかぶっていない人が多く、さらには、二人乗りはもちろんのこと、四、五人乗りをする人たちをよく目にしまし

た。日本に住んでいる私からすると、この光景は異常でした。反対に、改めてカンボジアから日本を眺めると見えてきた、日本の異常な面もありました。信号が青なら安全、誰も自分のモノは盗まない、という根拠のない安心感があるためか、歩きスマホ、電車でのスマホや居眠りなどが増え、注意力や警戒心が減ってきていたように感じました。他国に出向くことで自分の国についてよく考える良い機会となりました。

この経験で、世界とのつながりや支え合うことの大切さを改めて感じました。わたしは将来、このような海外経験をさらに増やし、そこで見えてきた日本の短所を解決したり、日本で身に付けた技術や経験を生かして他国のよりよい国づくりを支えたりして、日本と世界が共に進化していくために貢献していきたいです。



Phnom Penhの交通状況



ホストファミリーと 本人：左から2番目

## カンボジアへ行ってきました

沖永良部高等学校 2年 粟ヶ窪 陸

カンボジアに着いて、最初に感じた事はとにかく『暑い』ということでした。道路を見ると雨が降ったような跡があり、雨季の暑さは乾季に比べるとマシだと聞いていたのに裏切られたような気分でした。私の住む沖永良部島も非常に湿度が高くて暑い島ですが、比べものにならないな、という印象でした。翌日、JICAの事務所に行き、事前学習で勉強したことを探るところまでが深く知ることができました。「国を支援する」と聞くとお金を送ったり、学校を作ったり、井戸を掘ったりというような想像をしていましたが、持続的に発展していく國の形をつくるためには、その國の人材を育成することや法律や國の仕組みを変えていく必要もあるのだということを始めて認識しました。そして、ホームステイ先に移動したのですが、急に市長挨拶が入ったり、地図に書いてある場所と実際の場所が違ったりして、バスの中で長く待たされ、カンボジアの時間のルーズさと言うか、よく言うと『大らかさ』を体感しました。青年海外協力隊の視察時に聞いた話なのですが、『カンボジアの人々は物を大切にしない』ということが意外でした。日本などの国が物資をただ渡しているだけなので、『貰えて当然』という意識になり、貰う事に慣れてしまっていることが原因のようです。モノに気持ちが込められていること、想いが託されていることを心を添えて渡すことが必要だと気付きました。私は、日本人の昔からの考え方『モノを大切にする心』を誇りに思っています。カンボジアを訪れる日本人が伝えていくべきだと思いました。また『カンボジアでは情操教育がまだまだである』という話も聞きました。かつての混乱で知識人から順に殺されてしまい、学校ではそもそも教育者が足りない。音楽や体育、道徳、芸術などの授業が豊かな人間性を育むためには必要だと思います。私は、クメール語も英語もほぼ話せないままカンボジアに行きました。しかし、話せないことで『笑顔』の力を感じました。コミュニケーションの基本は笑顔で、カンボジア人の笑顔は心の温かさの表れでした。歓

迎の気持ち、相手を理解しようという気持ち、それらを表現するには、どんな言葉でも『笑顔』には敵わないといました。私は「自分がカンボジアのような国に対して、将来どのようなことができるだろうか」と思うようになりました。カンボジアは経済成長をしているとは言っても、まだまだ発展途上の国でした。交通ルールがあると思えないような交通事情、電線が電柱に何十本とからまっている様子、電気のない教室などたくさんの問題を目にすることができました。若者はたくさんいますが、その労働力を國の力に十分できているとは思えません。やはり、工業化を進めて輸出をして、國庫金を増やすなければ、いろいろなことに手をつけることができないのではないかと思います。しかし、発展するにつれて、格差は広がっていくのではないかと感じました。先進国は、自國の利益だけではなく、人を育てて産業を興してカンボジアが継続的に発展していくように考えなくてはならないと思いました。そして、「私自身の夢をどう実現させるか」から「どういう形で社会に貢献していくか?」という視点に変わりました。



ホストブラザーと 本人：右から2番目



ポンティアコーンにTRY 本人：中央

## 団員が感じたこと

### 高2の夏 カンボジアの夏

加治木高等学校 2年 福満 天翔

カンボジア出発の日、僕は不安も無くドキドキとワクワクで心がいっぱいでした。どんな国だろう？どんな人たちがいるのだろう？考え出てくるのは楽しい1週間でした。今思い出しても思わず笑みのこぼれる思い出ばかりです。しかもカンボジアの人たちは心が温かい人たちばかりでした。僕のお世話になったホームステイ先は最初予定されていたところではなく、急きよ決まったところでした。しかしそこの家族は嫌な顔をせずにむしろ歓迎してくれました。ご飯は美味しく家族の人も面白い人ばかりでした。

唯一不便だったのはトイレとシャワーでした。トイレは自動ではなく桶に溜まっている水を自分でくって流すというものでした。シャワーはお湯ではなく、全部水が出てきてお湯の温かさが恋しかったです。しかも、水圧が劇的に弱かったです。すすいでもすすいでもシャンプーやボディーソープは落ちず苦労しました。日本のトイレや水道設備に感謝しました。

プノンペン市内にあるセントラルマーケットはお店によって値段が違って値段交渉次第では安くなるというところでした。値段交渉はひとつの目標としていたことだったのでとてもワクワクしていました。到着するまでクメール語で、「安くしてください。」をずっと言っていました。いざ、行ってみるとみんな英語でした。日本語を話している人もいてビックリしました。値段交渉してみるとバンバン安くなっていました。お土産もたくさん買いました。

そんななかでも僕の印象に一番残っているのは海外青年協力隊員の壱岐さんが最後に話してくれたカンボジアの現状です。カンボジアの人たちはものを大切にしないそうです。なぜかというと、支援に慣れてしまったからだそうです。なにもしなくても欲しいものが手に入ってしまうという現状が生み出した問題です。今までの自分を振り返るとそんなことを一切何も考えずに募金などの支援をしていたなと思い残念な気持ちになりました。

そしてまた僕の中の世界が変わりました。これが発展途上国の現状なんだと目の当たりにしました。

この体験から「支援」というものを深く考えさせられました。僕の思う「支援」は『あげる』のではなく『伝える』ものではないかと思いました。ここでいう『伝える』は目と目を合わせ言葉の壁を越えお互いの現状を理解することだと思います。募金という目に見えない支援も言うまでもなく大切なものです。ですがそれよりも相手のことを理解し尚且つ顔を知ることでその支援は永遠のものとなると思います。そんなことを考えさせられました。

この研修のためにいろいろしてくれた両親、現地でお世話になったホストファミリー、同行してくださった団長はじめとした大人の方々に感謝の気持ちでいっぱいです。オーケンチャ。



クメール語で自己紹介 本人：左



バスの車窓から

# カンボジアで学び、感じたこと

鹿児島純心女子高等学校 2年 大城 彩音

私は、今回青少年国際協力体験事業に参加して、とても充実した八日間を過ごすことができました。

その中でも印象に残っていることは、青年海外協力隊員の視察です。なぜなら、私は以前から青年海外協力隊について興味があり、今回は自分の目で実際に現地で活動している様子を見られたからです。私たちが視察したのは、青年海外協力隊員として、サッカーの指導をされている壱岐さん、中学校で音楽の授業を行っている鈴木さんのところでした。お二人ともとても難しいカンボジア語を流暢に話しながら、子ども達と会話しているのを見てすごいなと思いました。お二人の話の中で、カンボジアと日本の違いを知ることができました。例えば、情操教育が盛んではないこと、土地はたくさんあるのに国自体にお金の余裕がないため、学校などの施設を作る計画が実行されていないということ、ポル・ポトにより先生の数が少ないということ。また、インターネットの環境もあまり良くないため、優秀な選手がいても発掘が難しいということ。これが青年海外協力隊のお二人が見るカンボジアの今であると思うと、日本の環境がどれだけ整っているのかということを肌で感じることができました。このような中で、世界のさまざまな国で活動している青年海外協力隊員の方は、とても素晴らしいなと尊敬の念を持ちました。

また、4泊5日のホームステイは私にとってとても楽しい時間でした。初めはどんな家族だろう、うまくコミュニケーションはとれるのだろうかと不安でした。けれど、ホストファミリーの温かい受け入れでそのような心配も全くありませんでした。ホストマザーが作ってくれたおいしいカンボジア料理を食べながらいろいろな話をしました。お互いの家族や将来の夢について、また、日本についてもたくさん質問されました。例えば、「カンボジアはあいさつやお礼を言うとき顔の近くで手を合わせるけれど、日本はどのような動作をするの?」とか、「日本語でさようならは何と言うの?」など、日本にと

ても興味を持っていてくれてとてもうれしかったです。私もカンボジアの年間行事や歴史をカレンダーを使いながら教えてもらいました。会話はほぼ英語で、私は英語が得意ではなかったので、初め少し戸惑いました。でも伝えようとする心は忘れませんでした。しかし、お互いの言いたいことが伝わらないときもありました。そんな時は、「Book! Book!」と言って、みんなで苦笑いしながら指さし会話帳を使って会話したのも、いい思い出です。本当に優しいホストファミリーでした。

今回この事業に参加して、本当に多くのことを体験し学ぶことができました。改めて、将来国際協力に関係あることをしたいと思いました。そして、自分が経験したことを多くの人に伝え、国際協力について知る人が増えたらいいなと思いました。この八日間で得た貴重な体験を無駄にしないように、今後の生活に活かしていくたいです。

最後に、カンボジアで活動するにあたりたくさんの方にご協力していただきました。感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。



カンボジアの中学校の授業の様子



ホストファミリーと 本人：左

## 団員が感じたこと

### 人なつっこいカンボジア人

江内中学校 2年 土持 ひかり

海外へ行くのは初めてで、少し心配もありましたが、飛行機の中でワクワクドキドキしていました。

カンボジアに着いて驚いたことは、私が思っていたカンボジアとはイメージが違い、明るかったことです。

「懐中電灯を持って行ったほうがいいよ。」と言われていたので、外灯はなく林の中にデコボコ道といったイメージだったからです。更に、ホテルから朝、外をのぞくとバイクの多いこと。三人、四人、五人乗りを平気でしていました。思わず写真を撮りました。又、道端にゴミが散らかっていたりと、日本では見られない光景でした。まだ発展途上国なので、教育面には力を入れているけれども、環境面といったところまで配慮がいってないということらしいです。

私は日本人でよかったと思います。きっとカンボジア人だったら、道の横断にも手こずり、ゴミをポイ捨てしてもなんとも思わない、人間になっていたことでしょう。

そして、待ちに待ったホームステイでは、日本人ではない、カンボジア人の優しさを学びました。覚えたてのカンボジア語と、身振り手振りで会話し、ホストファミリーの方々も、何とか理解しようと、必死に聞いてくれていたように思います。折り紙でツルやワンピースを作つてあげると、女の子はとてもニコニコして喜んでくれました。

メインの青年海外協力隊の方の視察では、その国の言葉と文化を学ぶのは、とても大変だと感じました。自分の言葉で伝えたほうが相手の心にも伝わると考え、現地の言葉を一生懸命勉強されているのには、感心させられました。又、カンボジアにはなかった運動会を行ったという話を聞き、カンボジアの文化が一つ増えたのではと、うれしく思いました。

又、学校を訪問した際には、どこからともなく子ども達がやってきて、一緒に写真を撮ったりしました。ほとんどの学生が、スマホを持っている現代っ子です。自

分の学校でも外国人が来たとしたら珍しくて見に行くと思うけれど、あれほど人なつっこい性格の人種の人々はないのではないかと思うほどです。この人なつっこさが、私には親近感があり、前から知っていたような、まるで近くに住んでいる友達のように感じました。

私はこの体験を通して、まだ何をしたい、何になりたいという具体的な目標はないけれど、海外へ行くことへの恐怖感がなくなり、それ以上の人々の優しさが心に残ったことは確かです。どこにいても、どこへ行っても、心で接することを忘れないようにしたいです。

最後に、お世話になったJICAの皆さんや諸関係者の方々、メール語と一緒に勉強してくれた学校の先生や友達に心より感謝します。そして何より、このメンバーのみんなと一緒にカンボジアに行けたことに、感謝です。ありがとうございました。



ホストシスターと 本人：左



村の風景

# 団長報告

## 第24回鹿児島県青少年国際協力体験事業 報告書

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会

理事 桑山 昌洋

カンボジア、タクマウ市での今回の体験事業が、大きな問題も無く成功裏に完了することができたのは、多くの方々のご尽力とご支援によるものと、今回の派遣団長としてまずは心より感謝申し上げる。と同時に同行者の諸君の奮闘にはまことに頭の下がる想いであった。この場を借りて改めて感謝申し上げる。

6月に第1回研修で始めて団員と会った際には、困難なクメール語に阻まれ、多少心もとなく思うことも有ったが、現地での活動中は団員それぞれの努力によって、多少の挫折や体調不良はあったものの、言葉の壁や習慣の壁を物ともせず、1週間の派遣期間を何とか乗り切った。解団式での団員の瞳の輝きと立ち姿には頬もしさを覚えたこともお伝えしておきたい。

協力隊員の活動視察では、実際の活動を見学し、さらには現地の生徒とともに一緒に授業を受ける機会を得たことで、カンボジアの子ども達の境遇を身をもって体験できた。このような機会に恵まれる中高生は日本中を探したって見つからないのではないだろうか?と考える。団員がそのことをどの様に感じたか、一人ひとりに聞く機会は無かったが、日本の教育環境のすばらしさや、現地の子供たちの学ぶことへの姿勢など、多くのことに気づいていたものと思う。また、ホームステイの経験はカンボジアの人々の暖かさに触れることで、自らもまた暖かさや優しさの大切さに気づいたのではないだろうか。

帰国報告会での発表でも、団員の各人の感想には、ひとつひとつ感心しながらであった。中学1年から高校3年までという幅の広いそれぞれの年代の個性に基づくさまざまな発見には、多くの大人が感銘を受けたであろう。

今回の研修の地、カンボジアは本来なら雨季に当たり、派遣前は気温はそこまで上がらないと踏んでいたのだが、いざ現地に到着すると、雨が降らず気温ばかりがどんどん上がり、連日37度以上という厳しい気候であった。そんな中で学校の部活動等で体を動かしている団員は、体力にも余裕があったと思う。

そこで、団員諸君に置かれれば、今後もそれぞれ体力の向上と鍛錬に努めることをお勧めする。体力に余力があり、気分が良くなれば、せっかくの機会を逃したり、または十分に味わうことができない。そのことに悔しい思いをした団員も少なからずいたと思うからである。余談であるが、私自身もギリギリのところで無事だった。自身の体力向上の必要性を感じること、しきりである。

最後になるが、団員の皆さんには、今回、体験したことを行後の人生の中で、何らかの形で活かしていただけるならば、私たち見守っていた側の最もうれしく思うところである。何も海外に出ることだけではない。広い視点を持ち、学ぶべきときに学び、自らの人生を切り開く力を身につけてほしい。

近い将来、大人になった団員にこの世界のどこかで、ひょっこり会った時には、ぜひ一杯おごさせてもらいたい。大いに期待している。



サテボー中学校にて記念品贈呈 本人：右



現地関係者と記念撮影 本人：左から2番目

## 同行者が感じたこと

### 青少年国際協力体験事業報告書

青年海外協力隊ガーナOB 濱角 龍博

穏やかで親切、争い事を好み、他人を気遣い、持っているものを分け合う。首都プノンペンの近郊で実施した今回の体験事業は、カンボジア人の優しさ、温かさ、寛容さに触れた滞在となった。

私と田代さんがホームステイする予定だった家庭は、受入ができなくなったとのことで、滞在先を急遽変更することになった。私達は、同様に滞在先変更になった慶亮と共に、希の受け入れ家庭、チュンテーンさん宅に滞在することになった。チュンテーンさん家族は、受入人数が一人から四人と、急に三人も増えたにも関わらず快く受け入れてくださり、すぐに部屋の準備をし、食事も用意してくださった。

チュンテーンさんはいつもニコニコしている。チュンテーンさんの家は、敷地の門から玄関まで30m程あり、家を出る度、帰って来る度に門の鍵を開けないといけない。私は引率としての仕事で毎日帰りが遅くなつたが、私の帰りを待つていて、嫌な顔を一切せずニコニコしながら門を開けに来てくれた。朝5時に出かけたときは、私より早く起きて私の準備ができるのを待つていて、徒歩10分だから大丈夫と言つたにも関わらず、集合場所まで車で送ってくれた。

お母さんのチャンソクンティーさんはとても誠実な雰囲気があった。言葉の関係でお母さんとはあまり話ができなかつたが、私たち四人を見守るような眼差しの奥に、力強さと優しさを感じた。

仕事があつたためホストファミリーと共に過ごす時間はほとんどなかつたが、食事の時にお互い片言の英語で、私のカンボジアでの活動や、チュンテーンさん家族の仕事のことなどを話した。多くは語れなかつたが、毎日のほんの短い時間の関わり、ちょっとした会話、ちょっとした気遣い、ちょっとした仕草、ちょっとした笑顔で安らぎに包まれたホームステイだった。

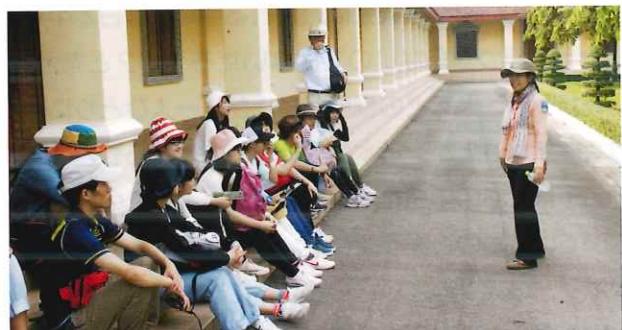
通訳のペインは早朝5時ごろから夜9時頃まで、時には夜中、日付が変わるまで通訳業務をこなしてくれた。

団員の送迎時、いくつもの受入家庭を周つて、同じことを何度も何度も説明するというのは、思つてはいる以上に精神的に疲れる。それが五日間朝夕続いた上に、時にはこちらの対応に不満を感じているようだったが、それをぐっとこらえてくれる。状況を理解し、自分を抑え、穏やかに事が進むことを第一に考えててくれていたと思う。

ソピヤさんはバスの添乗員であるにも関わらず、トラブル発生時には親身になって問題解決に協力してくれ、お別れ会の時は裏方でいろいろお手伝いしてくれた。穏やかな語りと笑顔は、バタバタとせわしなく過ぎる1週間に癒しを与えてくれた。

団長が滞在したコーアさん宅は、活動の拠点だった。引率スタッフが集まつたり、バスの発着場所となつたりした。自分たちの生活の場を多くの外国人がうろうろしている。時には心が落ち着かないこともあったと想像する。そんな非日常をコーアさん家族は受け入れてくれた。

その他にも受入家庭やトゥクトゥクドライバー、バスのドライバーなどいろいろなところでカンボジアの方の心遣いを感じた。さも当たり前のように過ぎた1週間だったが、多くのカンボジア人の優しさ、温かさ、寛容さに支えられた1週間だった。



ソピヤさんから王宮の説明



ホストファミリーと 本人：左から2番目

## カンボジア体験事業に同行して

青年海外協力隊ラオスOG 田代 芽衣

今回カンボジアの地に降り立った時、どこか馴染みのある懐かしい気持ちになったのは、協力隊員として2年間を過ごしたラオスに景色がどことなく似ていたせいでしょうか。しかしながら、初めて訪れる国に着いた瞬間はいつもと同様にドキドキしました。今回、私は保健医療に関する同行者という立場にありながら、子ども達と同じように不安と期待を胸に抱きカンボジアにやってきました。首都プノンペンから約1時間ほど離れた町に到着し、それぞれのホームステイ先に団員たちを見送りました。私は急遽ステイ先が変更になり団員2名と同じファミリーの元で受け入れていただくことになりました。

1週間の滞在のなかで特に印象的だったのは、地元の学校を訪問した際に、団員たちがそれぞれの思いを必死に伝えようと指さし会話帳を片手にコミュニケーションを図ろうと頑張っている姿でした。言葉はなかなかうまく伝わらなくても、共通に興味のあることを話題にしたり、ジェスチャーと笑顔で完全に相手を引き込み、打ち解け合おうとする姿はさすがだな。と思いました。

日を追うごとに体調を崩してしまう団員もいましたが、何事に取り組むにも一生懸命で、体調が思わしくなくても行事や人々との触れ合いに参加したいという意気込みを強く感じ、中途半端な気持ちでこの事業に参加しているのではないんだなと思いました。

特に水回りが日本と違うということで悩みの相談が多くありましたが、それぞれの家庭で戸惑いながらも、この文化ややり方を受け入れようと個人個人努力している姿も印象的でした。

慌ただしく時間が過ぎていく中で、ホームステイ先の家族には大変良くしていただきました。わずかではありましたがあなたの現地の人々の生活や習慣、そして文化を垣間見ることができました。夜遅く帰宅した際も寝ずに待っていてくれ、いつも笑顔で迎えて下さいました。

そして感動的だったのは、ファミリーとの別れの時

の団員の涙を見た時です。団員の言葉は思うように通じていなくても一緒に時間を共有していく中で心を通い合わせることができていたのであろうと感じました。人と人の関わり合いはやはり素敵だな。と改めて思いました。子供たちは、この短い1週間で驚きや感動といった特別な感情を味わったことでしょう。普段日本での日常を過ごしているときには感じることのない気持ちにもなったことでしょう。短い時間ではありましたが、各々が確実に成長へ繋がる何かを感じとったことだろうと思います。

最後に、このような機会を下さった、団長をはじめ事務局の方や同行者に感謝しています。私自身も今回カンボジア体験事業に参加して経験したことを、今後に生かしていけたらと思っています。



お別れ会にて 本人：右



団員と 本人：左

## ▶ 同行者が感じたこと

### 百聞は一見にしかず

(公財) 鹿児島県国際交流協会

交流推進員 直岡 佳奈

カンボジアへの出発の時。一番不安を感じていたのは、きっと団員ではなく、私だったことだろう。

5月。同行するのがこの私で良いのだろうか。そんな疑問と不安を抱きながら、毎日遅くまで準備をする日々が始まった。家に帰っても、カンボジアの文化や歴史を知るため、映画をみたり、本を読んだり、インターネットで調べたりした。

そして、迎えた出発のとき。無事に全員一緒に帰国することを目標に掲げ、中央駅を後にした。

同行中は、ただただ慌ただしくすぎていき、あっという間の7泊8日だった。

日本に帰ってきて、県庁や協賛企業への表敬訪問の際、初めて団員たちから、カンボジアで見たこと、感じたことを聞いた。もちろん、同行していたので、同じ経験をし、同じ場にいたわけなのだが、その時は、団員達が何を考え、感じているか分からなかった。

今回の研修で、一番多く聞かれた感想は、自分たちが恵まれていると感じたというものだった。おそらく、これまで団員たちは、ご家族や先生方、またテレビや本の世界でも、日本はとても恵まれていると教えられてきたのだと思う。そして、なんとなく、恵まれているのだと思っていたのだと思う。しかし、今回、カンボジアという国に行くことで、改めて日本や自分の置かれている環境というものを、外の世界から見て、考えることになったのだろう。

ホームステイ先の村は、プノンペン近郊の町だったので、ライフラインの水道や電気などは問題なかった。しかし、トイレやお風呂などは、日本と文化が異なる。蛇口をひねれば、温かいお湯のシャワーがでていた日本。クーラーがあたりまえの団員たちにとっては、一様に不便さを感じたことだろう。また、カンボジアの中学校・高校への進学率を知り、学校交流で現地の学校施設を見て、これまで何の疑問も抱かなかつたことに、気が付いたようだった。音楽や体育の授業があること、教育を受けられ

ること、教室に電気があること、そんなあたりまえの世界が崩壊した瞬間を味わい、感謝することを覚えたようだ。

ホームステイを通じ、カンボジアの人の温かさに触れ、言葉が通じなくても、分かろうとお互いに努力すれば、わかり合えることを実感していた。

また、日本の良さにも気づけたようだ。街にゴミが落ちていないこと、道がきれいに整備されていること。日本人の規律や規則を守る精神、安全・安心な暮らしなど。「あたりまえでない。」と人から教えられても、分からなかつたことを、実際体験することで、小さかつた世界が少しだけ広がったではないかと思う。

あくまでこの経験は一つの通過点に過ぎない。これから先、もっと多くのことを経験し学んでゆくなかで、もっと世界を大きく広げていってほしいと思う。

最後に、この事業に関わった皆様方へ。未熟な私にこういった機会を与えて下さり、サポートをしていただき、本当にありがとうございました。団員と共に多くの事を学ぶ機会となりました。今後、私自身もこの経験が生かせるように努力していきたいと思います。



お別れの朝 本人：右



ホームステイ先で折り紙 本人：右から2番目

# オークン —感謝のカンボジア体験記—

株式会社南日本新聞社 報道部

記者 上山 智子

「オークン」。クメール語で“ありがとう”という意味のこの言葉を、何度も口にしただろう。私や団員のホストファミリー、現地のガイドや通訳さん一。出会ったすべてのカンボジアの人が、穏やかで温かかった。

初めての海外ではなかったが、出発前にこれほど不安な旅は初めてだった。あいさつ以外の言葉は単語でさえ話せないし、聞き取れない。英語が通じるかも分からぬ。その上、今回は仕事だ。短時間で取材をしないといけない。不安に押しつぶされそうだった。

そんな気持ちを打ち砕いてくれたのは、ホストファミリーだった。家に帰るとお母さんはすぐに、「ご飯は食べた？おなかすいてない？」と（おそらく）聞いて、おいしいご飯を作ってくれた。私が「おいしい！ チョギヤーン ナッ（とってもおいしい）！」と言うと、うれしそうに「おいしい」と、私の日本語をまねして笑っていた。とても楽しい人だ。楽しい食事のおかげで2kgも太っていた。

英語が喋れる美人な3姉妹とは、お父さんに聞こえないようにこっそり恋バナをして盛り上がった。お父さんは寡黙だが、ビール好きで優しい人だった。ありがたいことに、ファミリーは帰国後も何度か電話をくれる。「おいしい」「ありがとう」「すみません」以外は相変わらず言えないが、なぜか心は通じた気がする。この家に滞在できてよかった。

ただ、蚊が飛び交う中での水浴びや、和式の手流しトイレには、なかなか慣れなかった。日本の湯船が恋しかったのも、今ではいい思い出だ。

滞在中、国際協力について考える機会も多かった。その中で「支援慣れ」という言葉を何度も耳にした。他国から物をもらうのが日常となり、寄贈された物資も特に大切にしないという姿勢は、正直理解が難しかった。何もしなくても手に入るこれまでの支援も、その姿勢を形成した一因なのかもしれない。

学校に行って、教育に重きを置かない国の現状を目の

当たりにした。家事のため長女に学校をサボらせる家庭。電球一つない、薄暗くて蒸し暑い教室。できなければすぐ諦める生徒。人が育たなければ、国が育たない。物資以外の支援の必要性を切に感じた。

ポル・ポト政権下で、実際に犠牲者が監禁されていたトゥールスレン虐殺博物館を訪れられたのも、大きな経験だった。VIP用の監禁部屋には、まだ血の跡が残っていた。目を背けたくなるような死体の写真が何枚も展示され、実際に使われた足かけや拷問用の水がめもそのままだった。犠牲者が監禁されていた半畳程度の個室に入ってみた。狭さで圧迫感があり、風通しも悪い。ここに何日も閉じ込められ、猛暑や空腹の中で拷問を受けたのか。胸がいっぱいになった。日本に帰って伝えなければと気を引き締めた。

最後にこの機会を与えてくださった関係者、カンボジアで出会ったみなさん、同行者や子どもたちに、感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。オークン。



サテボー中学校では現地の学生にも取材した 本人：左から3番目



大好きなホストファミリー 本人：前列左

# 同行者が感じたこと

## 未知の世界に触れること、伝えるということ

鹿児島テレビ放送株式会社

報道制作局報道部 記者 西 浩一郎

カンボジアでの経験は、終わってみればこれまでの報道記者としての経験の中でも非常に得難いものになった。私は報道記者として様々な場所に出向き、話を聞くだけや、資料に目を通すだけでは伝わらない、現場でしかわからない情報があるということはこれまで何度も何度か体験してきた。カンボジアでの同行取材は、それを改めて感じる機会だったように思う。出発前は日本語が通じないこと、また海外への渡航自体が初めてと言うことで、多少の不安はあったが、それでもどこか、これまでの経験の延長線上に今回の同行取材を捉えているところがあった。しかし実際にカンボジアを訪れてみると、想像していた以上のギャップがそこにはあり、自分がこれまで見てきた世界は非常に小さなものだったのだと実感させられた。信号がなく、交通の流れを見極めながら道路を走るバイク。水洗式でないトイレに、お湯の出ないシャワー。日本では当たり前に享受していたものが、ここでは全く当たり前ではない。カンボジアでの日々はそんな驚きの連続だった。現地で抱いたそんな感覚を言い表した言葉が、青年海外協力隊の視察でお話をうかがった壹岐さんの「日本の常識は世界の非常識」という言葉だ。自分の狭い世界の中で世界の全てを知ったような気になっていても、もっと広い視点で見れば自分の中の常識が全く通じないこともある。頭では理解していても、実感が湧かなかったそんな感覚を肌で感じることは、今回の同行取材がなければ一生訪れなかつたかもしれない。この貴重な経験に改めて感謝したい。

また、今回の同行取材では、伝えようとすることの大切さを改めて感じた。上述の通り、言語が違う、文化も全く異なる地での生活でありながら、ホームステイ先での取材は、そんな壁を乗り越えてコミュニケーションをとる皆の姿を見ることができた。指差し会話帳を使ったり、あるいは身振り手振りであったり、あるいはサッカーをしながら叫び声だけで意思疎通している様子を見ていると、大切なのはどんな言語を使っているかではなくて、

どれだけ伝えようとしているのか、その意思が大事なのだと言うことをまざまざと感じさせられた。同じ日本人であっても、おざなりなコミュニケーションでは伝えたいことが伝わらないことも少なくない。しかし言葉が伝わらない異国之地だからこそ、伝わることがあるのかもしれない、皆の姿を見ていて一番思はされたのがその点だった。そんな日本ではできない、とっておきの経験をした皆の姿を伝えたい。今回の取材ではそんな思いをこめながらカメラを回し、原稿を書いた。それが少しでも見た人に伝わっていたなら幸いに思う。

最後に、今回の取材では、慣れない異国之地で多くの人にご迷惑をおかけしたことについてはお詫びのしようもないものの、全体としては非常に思い出深い経験となるものだった。皆さんがもし、鹿屋を訪れるような機会があれば、是非 KTS 鹿屋支局に一声、連絡してほしい。カンボジアでの思い出に花を咲かせながら、大隅の美味しいものをご馳走したいと思うので。



取材中の一コマ 本人：右



プノンペンを巡る

# 鹿児島県青少年国際協力体験事業 OB 会

平成27年8月22日 これまでの団員、同行者による OB 会を開催しました。



これまでの派遣国（マレーシア、インドネシア、タイ、ベトナム、ラオス、カンボジア）



これまで参加された団員 / 同行者よりメッセージ

私にとって大変思い出深い体験でした。  
中学校・高校で経験できたのはたからだと思います。これからも頑張ってください。

第19回  
インドネシア派遣団員より

現在、福岡の専門学校で旅行業の勉強をしています。国家試験に向けての勉強をしています。この経験は私の進路において、とても貴重で大切なものです。帰国団員の皆さんもぜひその経験を、将来に生かしてください。

第19回  
インドネシア派遣団員より

茨城県の会社へ就職しました。社会人一年生としてなんとかやっております。たくさんの方にお世話していただき、ありがとうございました。重ねてお礼申し上げます。貴事業の発展をお祈り申し上げます。

第17回  
ラオス派遣団員より

現在、大学2年生でゼミでは東南アジアの文化などを中心に学んでいます。海外で経験したことがエネルギーになっているようです。

第22回  
ベトナム派遣団員のお母様より

同行させていただいたから、あっという間の1年でした。大変貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。本事業で学び多き日々を過ごされたみなさん、それぞれの職場・学校でますますご活躍されることを願っております。

第23回  
カンボジア同行者より





これまで 24 年の歩みの中で、301 名の中高生が東南アジア 6ヶ国に派遣されました。感受性豊かなこの年代に「本物」に触れる経験は、将来を考える際の原点となっているようです。また青年海外協力隊発足 50 周年の節目に値する 2015 年は、かつて参加した団員、同行者として派遣された方々にお集まりいただき、OB 会を開催する運びとなりました。派遣国や派遣時期は異なりますが、それぞれが現地で体験した「カルチャーショック」や「心打たれたこと」など、思い出話に花が咲いたようです。また、その後の進路やキャリア形成、今後の目標など各自に語つていただき、人生の先輩方には温かいメッセージもいただきました。このように実り多き事業が今日まで続いているのも、日頃よりご支援、ご協力下さっている皆様のお陰であります。心よりお礼申し上げます。最後は本事業のますますの発展を願い、万歳三唱で幕が閉じられました。



# 「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

## 1 趣 旨

鹿児島県の青少年を開発途上国に派遣し、その国づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動現場の体験や現地での協力活動を行うことで、国際協力に対する理解を深めるとともにホームステイや学校、施設などでの交流を通して相互理解を深め、国際性豊かな人材を育成する。

また、派遣後は、これらの体験を報告会などを通して学校や地元に還元し地域レベルでの国際化に寄与するものとする。

## 2 事業主体

主催：「鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会」

※構成団体：鹿児島県青年海外協力隊を支援する会

青年海外協力隊鹿児島県OB会

公益財団法人鹿児島県国際交流協会

共催：鹿児島県内の関係市町村

後援：独立行政法人国際協力機構九州国際センター、鹿児島県、鹿児島県教育委員会

協賛：鹿児島県内の企業

## 3 派遣先

派遣国はアジア諸国を対象とする（実績は別紙参照）

## 4 派遣者

参加者：県内各地から募集・選考した10～20名の中学生、高校生、専門学校生

同行者：実行委員会関係者と新聞社、テレビ局など報道関係者

共催市町村職員

## 5 実施時期

7月下旬～8月上旬の間の1週間程度

派遣の前後に事前研修会、報告会なども実施

## 6 経費

この事業の実施に要する経費は、実行委員会の構成団体、協賛企業、共催者（参加者に対する助成金による方法を含む）及び参加者が負担する。

## 「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績

	派遣国(地域)	派遣期間	人数 (生徒数)	参加者の出身市町村・共催市町村	備考
第1回	マレーシア (コタキバル, サマンドゥ)	平成3年 3/27(水)～4/3(水) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市, 阿久根市, 名瀬市, 市来町, 伊集院町, 邦答院町, 内之浦町, 佐多町	公募
第2回	マレーシア (スマラバッラ)	平成4年 3/27(金)～4/3(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市, 鹿屋市, 大口市, 指宿市, 隼人町	公募
第3回	マレーシア (クン, テラガアイル)	平成5年 7/23(金)～7/30(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市, 加世田市, 三島村, 隼人町, 志布志町, 高山町	公募
第4回	インドネシア (バンドン, パシールカリヰ)	平成6年 8/1(月)～8/7(日) (6泊7日)	15名 (9)	鹿児島市, 出水市, 指宿市, 垂水市, 菱刈町, 霧島町	公募
第5回	マレーシア (コタキバル)	平成7年 7/30(日)～8/6(日) (7泊8日)	16名 (10)	鹿児島市, 国分市, 須恵町, 宮之城町, 隼人町, 吾平町, 根占町, 中種子町	公募
第6回	マレーシア (タヒン, パリットムントリー)	平成9年 7/27(日)～8/3(日) (7泊8日)	16名 (11)	鹿児島市, 串木野市, 東市来町, 伊集院町, 郡山町, 日吉町, 吹上町, 金峰町	市町村推薦
第7回	マレーシア (クン, テラガアイル)	平成10年 7/26(日)～8/2(日) (7泊8日)	25名 (20)	鹿児島市, 大口市, 国分市, 菱刈町, 姶良町, 蒲生町, 溝辺町, 横川町, 栗野町, 吉松町, 牧園町, 隼人町, 福山町	市町村推薦
第8回	タイ (アユタヤ, ルンカーオ)	平成11年 7/30(金)～8/5(木) (6泊7日)	14名 (9)	鹿児島市, 指宿市, 加世田市, 喜入町, 笠沙町, 知覧町	市町村推薦
第9回	タイ (チェンマイ, メークホン)	平成12年 7/24(日)～7/31(月) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市, 鹿屋市, 国分市, 垂水市, 祁答院町, 財部町, 末吉町, 串良町	市町村推薦
第10回	ベトナム (ホーチミン, フーコイ)	平成13年 7/20(金)～7/26(木) (6泊7日)	19名 (13)	鹿児島市, 出水市, 加世田市, 国分市, 垂水市, 祁答院町, 溝辺町	市町村推薦
第11回	ベトナム (ホーチミン, タンソン)	平成14年 8/4(金)～8/10(木) (6泊7日)	17名 (11)	鹿児島市, 串木野市, 枕崎市, 国分市, 垂水市, 溝辺町	市町村推薦
第12回	タイ (カンチャナブリ県を予定していた)	平成15年度 SARS 及び鳥インフルエンザの影響により中止			市町村推薦
第13回	マレーシア (ケラルンブル, マラッカ市, ブルッサ州)	平成16年 7/19(月)～7/26(月) (7泊8日)	13名 (9)	鹿児島市, 枕崎市, 国分市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第14回	ベトナム (ハノイ, ホーチミン省モーハイ村)	平成17年 7/24(日)～7/31(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市, 枕崎市, 串木野市, 国分市, 知覧町, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第15回	マレーシア (ケラルンブル, マラッカ市, バラ州)	平成18年 7/22(土)～7/29(土) (7泊8日)	18名 (12)	鹿児島市, 枕崎市, 霧島市, 知覧町 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第16回	ベトナム (ハノイ, バイダニ省, バケン省)	平成19年 7/22(日)～7/29(日) (7泊8日)	23名 (17)	鹿児島市, 枕崎市, 霧島市, いちき串木野市, 南さつま市, 知覧町, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第17回	ラオス (ビエンチャン県ボンミー村)	平成20年 7/20(日)～7/27日(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市, 鹿屋市, 枕崎市, 霧島市, 南さつま市, 南九州市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第18回	ラオス (ビエンチャン県ナーツ村)	平成21年 7/19(日)～7/26日(日) (7泊8日)	18名 (14)	鹿児島市, 鹿屋市, 枕崎市, いちき串木野市, 南さつま市, 南九州市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第19回	インドネシア (南スラウェシ州ビハラサ村)	平成22年 8/1(日)～8/8(日) (7泊8日)	19名 (13)	鹿児島市, 鹿屋市, 霧島市, 南九州市, 南さつま市, 枕崎市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第20回	マレーシア (クランタン州クバソテラガ村)	平成23年 7/24(日)～7/31(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市, 鹿屋市, 枕崎市, 霧島市, いちき串木野市, 南さつま市, 南九州市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第21回	ベトナム (ホーチミン, ベンガラ省ガリオ村)	平成24年 7/22(日)～7/29(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市, 鹿屋市, 枕崎市, 霧島市, 南さつま市, 枕崎市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第22回	ベトナム (ダナン市, ホイアン市)	平成25年 7/21(日)～7/28(日) (7泊8日)	23名 (17)	鹿児島市, 鹿屋市, 枕崎市, 霧島市, いちき串木野市, 南さつま市, 南九州市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第23回	カンボジア (プノンペン, バッタンバン)	平成26年 7/20(日)～7/27(日) (7泊8日)	23名 (16)	鹿児島市, 鹿屋市, 枕崎市, 霧島市, 南さつま市, 南九州市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第24回	カンボジア (プノンペン, カンダール)	平成27年 7/19(日)～7/26(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市, 鹿屋市, 枕崎市, 霧島市, いちき串木野市, 南さつま市, 南九州市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
	計6カ国	計(301)平均13人			



=編集・発行=

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

〒892-0816

鹿児島県鹿児島市山下町 14-50

かごしま県民交流センター1階

公益財団法人鹿児島県国際交流協会内

担当：直岡 佳奈、福永 みゆき

裏表紙デザイン：崎野 ほのか（神村学園高等部 2年）

TEL : 099-221-6620 FAX : 099-221-6643